

作品比較法による題材「ルノワール作『ピアノに寄る娘たち』の鑑賞」

(中学1年生の場合)

*立 原 慶 一

Comparative method appreciation (junior high school first-year students) of Renoir's Girls at the Piano

TACHIHARA Yoshikazu

Abstract

Under the comparative method, pupils are asked to identify individual features of a mode of expression, for example how motifs (the subjects depicted) and scenes etc. in the material are endowed with character; methods of depiction and coloring. Moreover it is anticipated that in this setting they will become newly receptive to the aesthetic properties of both works. Assuming this to be the case, the method is seen as a powerful leader to sensitivity to the subject.

For the reference work, in order to give the totally opposite impression to the original painting, pupils were presented with an image altered in the following three ways: one, by reducing the number of figures in the painting from two to one; two, by darkening the tone of the canvas as a whole, and three, by erasing the vase with flowers. The validity of a comparative method employing a work thus modified by subtraction was examined via practical application.

Key words : aesthetic property (美的特性)
sensitivity to the subject (主題の感受)
opposite impression to the original painting (元絵と正反対な印象)
image altered (画像加工)
modified by subtraction (減算変形)

はじめに

作品の相互比較法は、本題材におけるモチーフ（描写対象）・情景の選定法及び性格づけの仕方や、描写・彩色法など表現方法のあり方を生徒に一つひとつ確かめさせる。しかも対比の場面で参考作品に特有な、美的特性が新たに感受されることが期待される。美的特性とは作品の感情性のことである。それに方向づけら

れた鑑賞体験が前提となって、生徒を元絵の主題感受に力強く導く働きがある、と想定される。中学1年生の場合、対比作品を参照枠として取り入れると、教育上効果的である。こうした命題を方法論的仮説として提起する。

参照されるべき作品として本題材の場合、元絵と正反対な印象を与えるべく、次の三項目に及ぶ画像加工を行うことにする。第一に登場人物を2人から1人に

* 美術教育講座

減らす。第二に画面全体の色調を暗めにする。第三に花が入った花瓶を削除する。作品はこのようにあからさまな手法で変形されるが、作品比較法が中学1年生の鑑賞教育にとって、発達段階に鑑みて有効であることを、実践的に探究してみようと思う。

1. 研究方法

学習指導要領の趣旨⁽¹⁾に沿ってありうべき鑑賞体験と、育成すべき鑑賞能力が明確にされるが、それを題材実践の骨子として、ルノワール作『ピアノに寄る娘たち』を取り上げる。中学1年生4クラス138人の生徒がその中で記した、鑑賞ワークシートの中身をすべて検討してみる。鑑賞体験と鑑賞能力の様相はそこにどのような形で現れるのだろうか。

ワークシートにおける質問事項は以下の通りである。

1. 二人の少女の関係は何でしょうか。また二人の会話も想像して、「吹き出し」に書いて下さい。
2. 作品からどんな印象を受けましたか、自由に書いてみよう。
3. どこにどんな色が使われているのか、書き出してみよう。
4. 二枚目の絵は元の絵と比べて、どのように変化したのでしょうか。印象を書き出してみましょう。
5. ルノワールはこの絵を描くことで、何を表したかったと思いますか。

ワークシートに記載された内容を分析するための切り口として、本稿では美的特性の感受と主題のそれを提起したい。その際、美的特性や主題の感受とは何か、が具体例とともに明確にされる。かくてそれらに該当しないものもここで洗い出されよう。感じ取られた美的特性については、ゲーレン・ヘルメレンの類型学的分類法が参考になるので⁽²⁾、それを基に分類し類型全体の中に位置づけることにする。

作品を見た第一印象としての美的特性の感受では、すべての生徒から有効な回答が得られた。たとえば「楽しそう（反応特性）。仲がよさそう（行為特性）。温かそう（感情特性）。優しい印象（行為特性）。和やかな感じ（感情特性）」が主流を占め、少数のものとして「静かな印象（行為特性）。昔風な感じ（趣味特性）。上品なイメージ（趣味特性）。ピアノに夢中な感じ（行為特性）。やわらかい感じ（自然特性）。金持ち

そう（趣味特性）。平和な感じ（行為特性）。休みな感じ（行為特性）。ゆったりしている（行為特性）。落ち着いている印象（行為特性）」がある。

これらの記載内容から、全生徒によって作品の感情性の謂いである美的特性が、形容詞として感受されたと見なしてよい。かくてそれは主流派も少数派も、すべて非美的な知覚内容ではないことが分かる。ここには能力差が認められないとの理由で、それを評価基準から外すことにした。

美的特性類型論の観点からそれらを整理してみると、行為特性が8つもあるほど桁違いに多くカウントされ、続いて趣味特性が3つ、感情特性が2つ、反応特性と自然特性（以後『特性』を省く）がそれぞれ1つずつであった。ピアノを弾いているアクション（行為）場面が描かれているという事情が、第一印象として選ばれた美的特性の傾向を決定づけたといえよう。

ちなみに鑑賞体験を形づくる契機として美的特性や主題の感受、「判断」の他に「解釈」がある。ちなみに芸術学において「解釈」とは作品の意味を解明することであるが、学習指導要領の「鑑賞」条項によれば、それは感性の働きによって感受されるべきものとされている。かくて本稿で、それは作品から感じ取れる一定の所感の根拠を、理性の働きによって表現方法の局面に探り当てる営み、と定義される。この解釈を行うに際して起こりうる新たな美的特性の感受と、続いて行われる主題の感受が評価基準として選定される。

ここで第一印象としての美的特性との違いを際立たせるために、解釈の場面で「新たに感受される美的特性」を「二次的な美的特性」と命名する。さらに主題とはワンセンテンスとしてありながら、感性の働きによって作品から感じ取られるべき意味や、心情の謂いである。

これら活動の成就や内実を分析することで、鑑賞の能力的特徴を類型化することができ、また能力別序列化が可能となろう。

2. 能力別類型化

ワークシートにおける第3の質問事項「どこにどんな色が使われているのか、書き出してみよう」に対して、生徒は「服に赤と白」「ピアノに茶色」「カーテン

に緑」「髪が金色と茶色」「ソファはオレンジ」「花瓶は黄色、青、白」「花は黄色、白、赤」「二人の肌はピンク、肌色」などと中立的な知覚内容を克明に記している。それらで終わっている者がいる一方で、他方で枠内をびっしりと書き尽くしたワークシートが見られた。その中に「生き生きとした感じ(行為)」「全体的に温かそう(感情)」「色がほんわりとしている(自然)」「ゴージャスな感じ(趣味)」などの美的特性を、形容詞の形で捉えた生徒が一定数存在した。

その中でもとりわけ多いのが「生き生きしている感じ(行為)」である。これは個々のモチーフや情景など、表現の内容面から受ける第一印象としての美的特性ではなく、表現の形式面への着眼を踏まえて、画面全体から受け取れる二次的な美的特性である。解釈の場面における感受にあっては作品の部分的ではなく、全体的な美的特性の感受としての意味合いを強めている。

彼らに共通な傾向を探してみると、第5の質問事項「ルノワールはこの絵を描くことで何を表したかったと思いますか」に対しても、溢れんばかりの文章をしたため枠内に収めていた。その中身とは主題感受をめぐる体験内容であった。項目として「人間関係の大切さ」「ほのほのとした(自然)空間の幸せ(感情)」「人が隣にいることは幸せ(感情)」「二人でいると楽しい(反応)」「娘のかわいらしさ(趣味)」「ピアノを弾く楽しさ(反応)」「華やかな雰囲気(趣味)の良さ」「日常生活の大切さ」などが上げられた。

ここで美的特性の感受と主題のその関係を探ってみよう。表現方法の特徴を見出させるための第3質問項目(「色使い」をめぐる解釈)に答える際に、二次的な美的特性の感受を付け加えた生徒にあっては、主題感受も同様にまた豊かになされたのである。両者には有為な相関関係が認められる。それを物語るかのように、中身として記された項目も実に多岐にわたっている。

本題材研究では、生徒の主題感受活動に着目する。そこでは能力的な特徴とレベルが究極的に、明確な形で現れているからに他ならない。主題感受の内容が最も多い全5項目に達した者を、最上位にランクづけて第一類型とする。続いて、それより一つ少ない全4項目を第二類型、全3項目を第三類型、全2項目を第四類型、最後に感受内容として全1項目のみを最下位の第五類型として規定した。このように主題の感受体験

における項目数の多寡を、ワークシートを類型化し序列化するための指標としたい。

この類型別序列を基準に据えて、鑑賞能力の諸局面をめぐる関係の構造化と、数値化を進める。この研究方法論によってすべてのワークシートを分析する。

各類型の人数を調べてみると、

1年生4クラス(138人)

第一類型	8人	5.8%
第二類型	26人	18.8%
第三類型	16人	11.6%
第四類型	48人	34.8%
第五類型	40人	29.0%

類型全体を見渡して第三類型の数値が低く、能力的に中位という序列的位置にあることを勘案しても、ややイレギュラーな感はまぬがれない。それは平均的な成績を示すとともに、全類型中、数量的に一番多いのが普通なのであるから、おおかたの予想に反している。ただしそれ以外の類型には、すべて順当な数値が並んでいる。本稿における類型化は、能力的な特徴が的確な形で現れたものであり、研究方法論的に見て極めて妥当と考える。しかしながらそれに潜む問題点のようなものもここに一部、露出したのかもしれない。それは今後の研究課題となろう。

3. 類型別序列と美的特性の感受能力

第3の質問事項「どこにどんな色が使われているのか、書き出してみよう」に答えるべく、生徒Aは「・赤→花 ・黄→花、カーテン、かけられた絵、ソファ ・白→ジャンヌの服、楽譜、花、えり ・青→ジャンヌのリボン ・紫→ピアノ、カーテン ・黄緑→カーテン、花びん ・こげ茶→ピアノ ・朱色→ジャンヌとフランソワのほっぺ ・生き生きとした感じ」と記した。この生徒は非美的内容を中立的な形で、知覚したままを綴っていった。しかし、それとは異なる美的特性の感受体験を言い表すべく、最後に「生き生きとした感じ(行為)」という語で形容したのである。

生徒Bは「・ピアノ→茶色、紫 ・フランソワ→赤に近いピンク ・ジャンヌ→青、白 ・二人の肌の色→ピンク、肌色 ・全体的に明るい色」と中立的な知

覚内容を書いた後で、「生き生きとした感じ（行為）」と述べた。これはまさに美的特性に他ならない。

生徒はC「・肌色（手、顔）・白（楽譜、服、花）・黄（花、服、楽譜）・紫（ピアノ）・青（服、髪ゴム）・オレンジ（花、服、いす）・緑（カーテン、花）・全体的に明るい・よく暖色を使っている」と綴った後で、「生き生きとした感じ（反応）」と美的特性を最後に付け加えた。

ルノワールの「色使い」（彩色法）に認められる特徴について答える際に、上記事例のように、美的特性の感受内容を記している者の数と比率は、以下の通りである。類型別序列ごとに示す。

第一類型	8人中8名で	100.0%
第二類型	26人中24名で	92.3%
第三類型	16人中8名で	50.0%
第四類型	48人中8名で	16.7%
第五類型	40人中6名で	15.0%

この調査結果から見て上位類型の者ほど、表現方法としての色使いを解釈する際に、二次的な美的特性を新たに感受する比率が高い。能力別類型と美的特性の感受達成率の間には、比例関係が認められる。言い換えると、本稿で鑑賞能力の基準と見なされる類型別序列と、美的特性感受の能力差はピタリと整合していることが分かる。

4. 作品比較法における美的特性の感受

作品比較法は、本題材におけるモチーフ（描写対象）・情景の選定法及び性格づけの仕方など表現の内容面や、描写・彩色法など表現の形式面のあり方を対比的に一つひとつ確かめさせる。しかもその場面で参照作品に特有な、美的特性が生徒全員に新たに感受されることが期待される。それが前提となって、主題の感受につながる太いパイプが現出すると見なされる。中学1年生の場合、加工作品を鑑賞体験の参照枠として取り入れるならば、発達段階的に見て教育上効果的である。こうした命題を方法論的仮説として提起する。小論では、この有効性を実践的に検証しようと思う。

参照されるべき作品に、元絵と正反対な印象を与えるべく、次の三項目に及ぶ画像加工を行う。第一に登場人物を2人から1人に減らす。第二に画面全体の色

調を暗めにする。第三に花が入った花瓶を削除する。このように表現の内容面と形式面において、減算加工された作品を参照枠として提示する。この作品比較法がもたらす、中学1年生に対する有効性を探ってみよう。

そのため第4の質問項目を設定した。それは「二枚目の絵は元の絵と比べて、どのように変化したのでしょうか。印象を書き出してみましよう」である。この質問に答えるに際して、とくに参照作品から対比的に美的特性を、新たに感受した生徒は以下の通りである。

第一類型	8人中8名で	100.0%
第二類型	26人中26名で	100.0%
第三類型	16人中10名で	62.3%
第四類型	48人中40名で	83.3%
第五類型	40人中32名で	80.0%

第三類型の比率は能力別序列の中位に位置しているため、鑑賞能力における「おおむね満足」評価としての全体的な傾向を、象徴的に表しているのが普通である。しかし62.3%と、第四類型の83.3%や第五類型の80.0%と比べて、20ポイントも悪い成績を残している。その点で本調査項目における第三類型の成績は、イレギュラーな様相を呈していよう。ここは本稿に独自の能力別類型化の試みに潜む、いくばくかの課題が現れたのかもしれない。ただしそれ以外で類型別序列と美的特性感受の能力差はピタリと重なる。

5. 鑑賞体験の事例

次に鑑賞体験の事例を見てみよう。

生徒Dは、第2の質問事項「作品からどんな印象を受けましたか。自由に書いてみよう」という第一印象を尋ねる問いかけに対する回答として、「・かなりリアルに描かれている（反応）・仲良さそう（行為）・優しい感じ（行為）・楽しそう（反応）・温かそう（感情）」などの美的特性を記した。第4の質問事項「二枚目の絵は元の絵と比べて、どのように変化したのでしょうか。印象を書き出してみましよう」という作品を比較する課題に対して、「・フランソワがない・暗いイメージ（感情）・さびしそう（反応）」と答えた。

続いて第5の質問事項「ルノワールはこの絵を描くことで、何を表したかったと思いますか」に対して

「・人の大切さ ・二人でいると楽しい(反応) ・ほのほのとした(自然)空間の幸せ(感情) ・人が隣にいることは幸せ(感情)」を表現しようとしたと記述した。ここからは作品を比較することによって、生徒Aが二次的な美的特性である「さびしそう(反応)」を、参照作品から新たに感受したこと。それが契機となってワンセンテンス的形式を備えた、主題にまで勢いよく進んでいった様子が窺い知れる。

ワンセンテンスとはある思想内容を表す、一続きの語のまとまりの謂いである。たとえば生徒が記した「人間関係の大切さ」は、本題材実践で最も多くの生徒によって主題として感受されたが、それは「人間関係を築くことは良いことである」と同義であり、一定の思想内容を示している。また「和やか(感情)で平和な(行為)日常の暮らしが幸せ(感情)である」も二番目に多くの生徒によって感受されたが、それもワンセンテンスとして存在する主題である。

それに対して主題感受として認定されない例とは「和やかな感じ(感情)」「温かそう(感情)」など、美的特性の感受のレベルに留まっているものである。彼らの内には、マイナス的に加工された作品である参照枠が鑑賞体験に正当に位置づけられていないから、それが一向に異質化し高次化しないのである。

生徒Bは第一印象として「・ピアノを教えあつていすることで、二人の仲の良さ(行為)が感じられた。・楽しそうな雰囲気(反応)」と書いた。作品の比較を通して「元の絵は隣に誰かがいたり、花を描いたり、明るい色で描かれたりしていて全体的に生きいきして見えた(行為)。二枚目の絵は一人になってしまい、女の子の服の色から黄色がなくなることによって、さびしい雰囲気しか(反応)感じさせない」と記した。主題感受として「・日常生活は大切だよ。・家族の大切さ ・みんないれば楽しく(反応)、幸せ(感情)だということ」と記述した。

彼女も作品比較の場面で、参照作品から「さびしい雰囲気(行為)」を強く感じ取ったからこそ、ワンセンテンスとして存在する主題の感受にまで、弁証法的に到達できたものと思われる。それは加工作品を参照枠として行われる、二次的な美的特性の感受の後になされるのである。いわば鑑賞体験の異質的高次化が予想通りになされたのである。

生徒Cによれば「元の絵は明るく(自然)楽しい感

じ(反応)だったが、二枚目はつまらない感じがした(反応)。紫やこげ茶が目立って、絵が暗いイメージ(自然)になった。また一人になったことでさびしく感じた(反応)」と書いた。

生徒Dは「花もなくなったし、フランソワもないから、ジャンヌや周りの色がくすんで生気がない(行為)。影がこくなり壁やカーテンの色も暗く(自然)、さびしい(反応)」と記した。

生徒Eによれば「姉がいない。部屋全体が暗い(自然)。ジャンヌの表情が悲しそう(感情)。少し不気味で(反応)がらんとしている(自然)。髪の毛の輝きがない。さみしそう(反応)」である。

参照作品に対しては「つまらない」「生気がない」「がらんとしている」など、いずれも否定的な評価が下げられた。生徒は自らの価値意識を働かせることで、逆にそれほど元絵がすばらしいことを実感したのである。生徒によって主体的に価値判断がなされたことで、彼らの美意識が高められたといえよう。

6. 参照作品における「さびしさ」の感受と主題感受の能力

作品を比較することで最終的に「さびしさ」(反応)を、参照作品の根本的な美的特性として感受した生徒が、果たして評価に値する主題を受容したかどうか。そうした関連的な視点からワークシートを分析することにする。達成率は以下の通りである。

第一類型	8人中8名で	100.0%
第二類型	26人中26名で	100.0%
第三類型	16人中12名で	75.0%
第四類型	48人中34名で	70.8%
第五類型	40人中20名で	50.0%

第一類型は鑑賞能力的に見て最上位に位置するが、表現方法的な特徴及び価値に着目する場面で、全員の生徒が「さびしさ」(反応)を二次的な美的特性として新たに感受している。それがきっかけとなることで、生徒は何ら滞りなく主題の受容にまで到達している。そうした事情から作品比較法に基づく解釈行為の場面において、第一類型は鑑賞能力的にその面目躍如たる好成績を残している。それは本稿で鑑賞能力的に最高位にランクされた。参考作品から反立的な美的特性を感受する、という体験が前提として事前になされ

た。それだからこそ、元絵をめぐる鑑賞体験は質的に変化するとともに高次化し、評価に値する主題感受を後にしっかりと導いたといえよう。

おおむね上位に位置づけられている第二類型では、第一類型と全く同レベルの好成績を残した。

第三類型は能力的には中位に位置するが、全体の中で平均的な成績を残し、それは当然のように第二類型よりも鑑賞能力の成績は下回る。

第四類型はもともと下位にあるが、それを例証するかのように達成率は7割に留まり、平均的な第三類型よりも成績は下回る。

第五類型は最下位にあるが、それを裏付けるかのようにこの調査における達成率は、5割にしか達しなかった。

このように鑑賞能力の類型別序列は、参照作品における「さびしさ」感受の程度を克明に反映することが分かる。言い換えれば、作品の色使いなどを解釈する場面で図らずもなされるべき、反立的な美的特性感受のレベルは鑑賞能力の類型別序列によって、根本的に規定されるのである。

まとめ

二作品に関する表現方法の特徴と価値を対比的に探る場面で、参照作品に特有な反立的美的特性である「さびしさ」(反応)を感受できたか否かは、その後元絵をめぐるなされるべき主題感受の成否に直結する。それは中学1年生における、鑑賞体験の異質的高次化を決定づけることがわかる。

本題材の実践において主題感受は最終的なねらいとされるが、それが評価に値する内容にまで到達するためには、次の事柄が有効であることが判明する。それは、画像を加工することによって本作品の雰囲気をも根本的に覆すような、いわばカウンター的理想としての美的特性を、生徒に直観的に把握させることである。

各類型は能力別に序列化され元来、本研究で得られた基本的な知見であるが、これと美的特性感受に関する調査結果における能力差とは、びたりと合致するのである。かくて作品比較法における美的特性の感受度は、鑑賞能力を判定するための新たな指標となりえよう。

註

- 1) 中学校学習指導要領美術編、[2・3年生] B鑑賞(1)の「ア」は理論的に無自覚ではあるが、鑑賞体験の本質に関する洞察と、それに基づく鑑賞能力観を打ち出している。これは近接学問分野にはない、美術教育独自の見識と言ってもよい。それに対して「イ」と「ウ」は美術史及び芸術学を前提とした、知的教養主義に依拠している。インターネット上で眼にする指導案の多くは芸術諸学のダイジェスト版的様相を呈しているが、これに従うのであれば生徒の感動する心はしばみ、美意識も育成されまい。本研究はこの趨勢を反省し、「ア」がねらいとする「美的特性の感受」「解釈」「主題感受」「判断」の4契機が達成されるような、授業モデルを構築する。それによって、生徒が主体となれるような鑑賞授業を、促進できると思われる。
- 2) ゲーレン・ヘルメレンの美的特性に関する類型学的分類については、東北芸術文化学会第15回大会(2009.7.4.)における研究発表、松崎俊之氏「美的特性と芸術的特性」から教示を受けた。
Hermerén, Gören [1993]. "The Variety of Aesthetic Qualities." In: Michael H. Mitias (ed.), *Aesthetic Quality and Aesthetic Experience*. Amsterdam: Rodopi B. V. 1988. Reissued in: John W. Bender and H. Gene Blocker (eds.), *Contemporary Philosophy of Art: Readings in Analytic Aesthetics*. New Jersey: Prentice-Hall, pp.260-7. 松崎氏の最新版の研究成果は「美的特性に関する階層構造理論」『芸術文化第15号』(東北芸術文化学会誌)に所収。

※本発表は23～25年度科研基盤研究(C)「鑑賞教育指導案の批判的考察と授業モデル(方法論)の構築」(課題番号23531151)による成果の一部である。

(平成23年9月30日受理)

